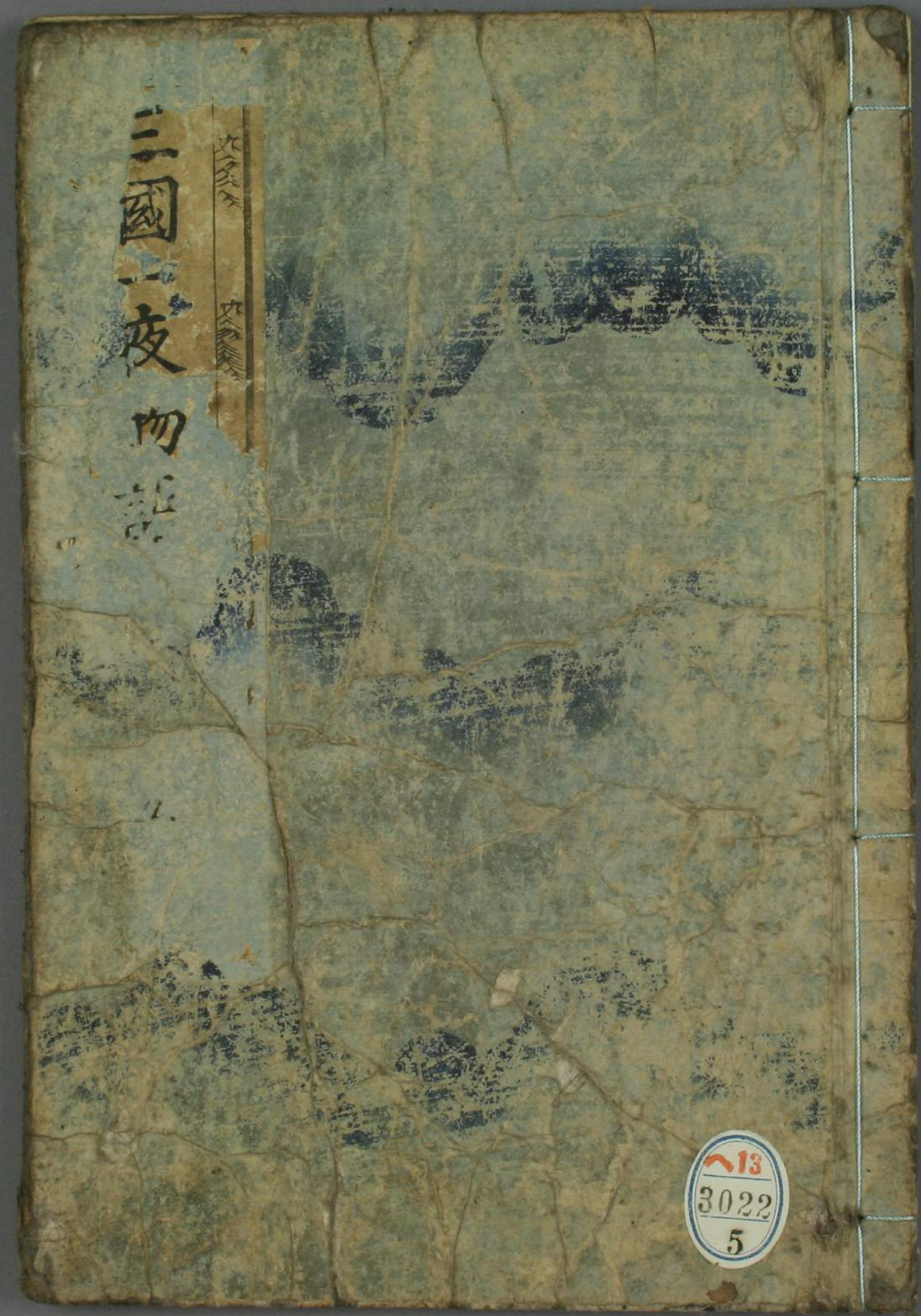


KODAK
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



三國一夜物語

文政
文政

13
3022
5



特
3022
5



富士 三國一夜物語卷之五



東都 曲亭馬琴著編

第六編 阿弥陀寺の法會の照行浪路を眷恋竟

富士太郎夫婦ハ殊々不路をいとぎ旭ややく海

面を登るる家より着て見る門ハ不引立たるま

めて裡より起出一氣色もなけはバや戸を引明て

入るふと浅き母ハ柱の縛つひらきそのやうな長

き刀を服する大男血を吐きて殪とてあり富士太郎も櫻

子も只と呆まふ呆まふ母の索とときさかぐ勅りて

故を問ひ三雲も子どもホッ恙るふ安堵て物がるやう

三目

疇昔血身夫婦と待ちびて甲夜のかど門の立つ
 りほど。吏の刻過るるまじも。多しうるりなけは。勝間
 村のあうまじも。ゆきて見たるとおひいし。跡の守る人も
 むらさむ。そはもころ小まをささぬうきな思ひぬさす。あ
 のも寐らむとて待とまるや。ややく丑三のころ。至りて
 門の戸やうくと敲くゆ。とて回答て鎖を外し。戸をさ
 引明し。血身が帰りしあむ。でこの男つと裡の入り
 るが。吾身の胸をを掴み。右のひみ刀を抜りし。や
 やよ老女よ。驚くともうれ。盗人の大將軍の
 脱しりや。人の告んとせ。夷狄の国にありと。胸の穴ある

人ころをべー。音なせと。ゆひつ。鈎索りて縛つけま
 刀を閃く。そゆやう。汝が墨江にありし。物
 うらざりし。とを。よく聞て来つ。そは移り住ても
 財ハ秘おきけん。そく藏らる所をおし。えよ。ゆい六呼
 吸とむべし。ゆう毒懲ゆ。吾身つぐ。おひい。そは
 隣も遠けは。ありて助くる人も。あつ。あつ。とくま
 争ひて。可惜命をおく。富士太郎が。帰る来て
 ささる。悔歎くら。よや些の黄金を得。ささるとも
 財ハま。聚るとも。あるべし。と深念し。衣服金銭の
 在。とろをかして。とぐく。せし。彼。あつ。あつ。と

聚めて以て申す。まても今夜へ幸ひきとよ。甲夜より遠
 近を走り巡りし。道どさき。贓物もかく。そのととあり
 設けて来し。のせ。の元奉ふも。握り足らぬ。かの金を
 得し。あまう。ゆ。瘦。ま。物。か。う。う。し。ど。酒。ゆ。飲。ん。と
 以。吾身。を。酒。ハ。ま。く。も。嗜。ま。る。む。殊。ま。る。ま。る
 喪。ぬ。も。ア。そ。あ。ま。バ。く。る。の。露。ま。る。も。う。と。の。ま。ま
 ら。餅。う。も。飲。ま。う。も。食。せ。よ。と。以。餅。ハ。響。外。より
 貫。る。萩。の。花。餅。の。けり。ま。り。か。あ。あ。る。ぞ。彼。所。の。桐。を
 罟。の中。の。と。教。ゆ。は。盗。人。あ。て。卯。原。が。饋。り。し。る。餅。を
 取出。て。只。飲。が。ごと。く。三。ツ。四。ツ。も。食。べ。し。忽。地。一。声。噫。と

吐。血。を。吐。て。仆。ま。つ。つ。が。彼。餅。ハ。毒。せ。や。入。色。けん。
 見。る。顔。の。色。も。く。ア。そ。終。の。緯。ま。ま。う。り。と。語
 る。夫。婦。大。き。驚。き。あ。わ。し。母。が。僥。倖。し。て
 脱。且。う。と。ま。う。と。ひ。く。舌。を。振。ひ。て。怖。ま。し。富。士。太。郎
 掌。を。丁。と。うち。彼。卯。原。が。日。来。信。こ。く。款。待。せ。し。ハ。
 吾。儕。を。害。せん。の。謀。あ。て。あり。つ。る。ぞ。や。と。れ。め。思。ひ
 合。さ。ま。バ。彼。の。餅。と。饋。り。来。ぬ。と。き。誤。り。し。り
 落。し。し。る。体。み。見。せ。ま。が。一。ツ。の。餅。と。門。あり。犬。の。食
 疑。ま。し。の。新。計。あ。て。その。一。ツ。の。毒。を。入。し。て。餅
 餅。と。食。ふ。と。ま。立。地。の。死。を。べ。き。と。天。地。神。明。と。



笙の秘書もりふてふ入るぬ。さう忙ハ一けは詳
 言さむ。その櫻子の問ひも事。後まで彼卯原と
 あり逃さ。隣と唾ともひわづら。さうまてんといひも
 めど。外方へ走り出阿部野を望てりとき一がまを
 ちて忽地おりの中。五四郎が変死のことと名く村長
 中途中よりまが村長が家へ到りて。あつぐのゆゑと告
 直み走り去らんとまを。村長呼びをめて。そのあつと
 輕き似てなるたを。狂るむ。いざこざとともみ知縣の
 第宅へまかりさるへといふ。固辞がう。うちつきて彼

處へ到り。備由を訊く。小吏知縣の命を稟富士
 太郎を將て浅沢にいゆき。五四郎が死骸を展檢
 果て。縁故を問究まどせいかどか。さうやくその曠昏ひり
 果て。小吏ハ帰りけり。富士太郎はいよ焦燥てあつと
 阿辺野へ走り行き。卯原ハさう。突あつけん。いつち
 ともなく逃亡さ。六漏りなる朽か。さまとひらうとら。や
 家の家め卯原がを問ひ。その人答へて。彼婆何の
 りけん。俄項の家賤を船の積のりて。出さ。去り。人亭
 午のころさうと語る。さう。逃隔。さうとあつと
 絶え。ひな。家へ帰りて。卯原が逃去り。七とを

告まむ。母も櫻子もいと遺憾ぞおがへける。抑彼五四
 郎ハ原無頼の光棍めて。諸國を經廻り人の女児を
 拐挐などせしが。近頃浪速の來り專賊せりて人を
 屠ぬ。あるは天細恢として疎めし。漏さむ彼不意
 富士が家に入り。まづ毒殺して卯原が伎倆を顯
 せり。うて富士太郎ハその夜櫻子も相語り母の
 對ひて言をせり。ゆづる二月廿五日。父淺間の撃と
 たまひしより。復讐の片時も忘る隙ありと
 ぞ。そのころハいさむ。免許を蒙らざりしを黙止し。又
 あへ移住て。忌も果てをとおひひつる。得ざるを

せし樂書さへ。いかに復讐をば。をいも猶豫さし
 ます。彼樂書をば。洛の獻ら。父の過ちをも許
 めひて。召環さるる。ハ相違もわらざり。君の
 仕へて。身を技めし。讐人を索ねざし。粵の大
 内左京權大夫。良義弘。ぬ。ハ去年の冬。山
 名氏清。誅罰の恩賞として。室町殿山名が舊
 領和泉。紀伊を増与へ。めせりて。義弘。近曾泉
 州。堺の城。在。とむ。この人ハ上。の。ぬ。お。え。いと。愛
 威徳。管領。も。超。う。の。嚮。あ。父。を。猫。間。川。の
 陣中へ。招き。ひ。つ。る。縁。あ。し。も。の。色。バ。明。日。塚。へ。赴

きて義弘ぬふ縁由を告て笹の秘書を領進
 らせ又母のひきも頼安えよるが後かきし七雙人を
 寃ぢうおひひたぐるりとりくば三雲安て復讐言のひ
 くるぞのるべきまこと櫻子孕てややく月もさる
 ぬまふせめて秋のころまふらふありて産をも見果
 させらるるまづり旅ごらよへくといふ富士太郎答て
 母の命推辞ぬらぬど子の故をりて親のひひ
 換ごし。継その赤子生きて父をあらざともか母
 とを養育するへ櫻子もひとさつようるべし
 のへ許しおろしませといひておひひ定めらるる氣色な

且三雲もさのへんともうらび留む富士太郎の次
 日彼樂書と懐みして塚へまわり大内家の老
 臣の就て縁由を言せしる義弘聽て對面あり
 けり富士太郎まらら委細ひりて人を演説して
 樂書を豫け進らまは義弘只會感嘆あり
 この秘書のひきを洛へ訴ふとまらるる所領元のひ
 返しゆるべき條仔細ありととりどもいまだ父の讎言を
 報へねば仕官ねらるるざらむいと道理みおるあ
 る其許か志と致その日まてまことれと領りあ
 言の序ゆら室町殿へも言まべし又老母妻との

事ハよきハ扶持まきけは。聊もかひひがまき。旅
 だちひらう。と懇切言葉ぬらう。て安えさる。へ。バ
 富士太郎ハ恩澤身ぬめれる。と謝て城を
 退出浅沢ぬえ。三雲櫻子ぬそのひを物ご
 吾身ハ勿論父も親しく。大内家ぬまうぬひ。は
 めらねど。公明ぬして親疎さき。うくのどと。と稱
 賢。ま。櫻子ぬ對ひて。吾身今より外ぬありて。
 雙人ぬ寛と。と。一身のうぬて却て易く。又内身
 家ぬ留。て。母ぬ仕へ。見を養ふ。と。其難。去

是ハその赤子生え出て。健ハ生育とも。うらぶ。と。も
 愛ぬ溺。まで。母のひと。等閑ぬ。まぬひ。と。教諭。
 又母ぬ言ま。や。月俸ハ大内家より賜るべけれ。ハ。
 ぬ。と。安くお。が。一。但。と。ま。が。旅ぬありて。
 い。その。年。月。を。経。ると。も。と。えて。音。耗。ハ。ひ。を。へ。と。も。
 と。ま。ハ。雙。言。人。ぬ。漏。さ。と。あ。り。ぬ。ゆ。あ。る。り。只。ひ。ら。ま。で。も
 音。耗。ま。く。ハ。富。士。太。郎。ハ。病。と。も。ぬ。く。て。仇。を。索。巡
 よ。と。あ。り。せ。ぬ。う。と。い。ひ。訖。り。俄。頃。ぬ。行。装。を。整。へ。
 次。の。日。の。彼。誰。時。萬。里。の。旅。路。ぬ。赴。け。ハ。親。子。妹。
 夫。の。恩。愛。も。豫。て。ぞ。あ。り。ひ。諦。む。と。今。ま。餘。波

おしまれて。泣トとまればわめくふ。とあり落る涙の
 間より三雲いと心わそげぬ。やよ富士太郎。おん身
 とと立出てそのゆくうへ東り西り。いとあつさしと
 ぬ。富士太郎答て赤松の家臣室積平馬とりぬ
 りの照行の親いけは。警人い定めて播州ぬこそ
 匿居るべけ。よりてまが播州を索巡り。其所
 めて環會を。國く残りなく編歴しとるべし。唯
 らがくは。母よく自愛し。照行が首を引提て。
 臆て帰るをまらぬ。と言葉しくいたまち。既ぬま
 出んとするを。櫻子夫の袖を引て世の常言ぬ左孕ハ

男子多とひ傳へたる。胎内の子り男子ぬてぬ
 何と名づけたるらんと。いハ富士太郎を。沈
 吟し。東ぬ生。彼ハ西ぬ生。比叡を都の富士と
 いハ。叡太郎とも呼びぬ。女子ぬるハ母ぬ問てよ
 名づけぬへ。と回答して。草鞋穿しぬ立出つ三歩
 五歩走らせ去ると。裡ぬ母と櫻子が。つらと泣音ハ
 耳より。曾を衝抜どらぬと。とらよふくて。ハトと
 ありぬ。足とる。播磨路まして旅ぬね不題
 浅間左衛門照行ハ往ぬ猫間川の陣中ぬて己ぬ
 富士右門を押撃を。と思ひ。まが室積平馬ぬ

三目卷之五

およ旨ときやうみ平馬もま心よふぬものさむを。
 こをを宜なりと。よろろ示し合せて立ち多き一かど照行
 いよ心定まり。その夜右門を火攻し。村主兵助をも撃
 たりし。終み高峯の大鼓を奪ひ得ぞ。浪速の浦
 より船出して。播州に逃下り。ちを立潜ひてあつふ。
 いく程もかく赤松義則。猫間川の陣を引をひて帰
 城ありし。室積平馬も主に従ひて。播州に立ち上り。
 浅間照行の告てり。近曾浪速めて風声を安ぬ。
 富士太郎既復讐の免許を蒙りし。とゆ。彼も也
 身が。こをと親きをよくまはば。うらむらむら。の州を索ぬべし。

ちうるを虚くとらふ。あらんハ謀の拙き。似う吾おのよ
 長門國赤間関の西北。西山中と。父里あり。この地方
 西へ小串河棚の郷の外。渺々蒼海ありて。東へ又
 今尾吉田の郷を隔て。中一條の大河あり。まらち街
 道を去る。遠くを。究竟の隱家あり。幸ひ彼地。豫て
 あれる人も。ぬき。身が。頼を遣べし。まが。彼首。一
 年のまうりも立潜て。富士太郎を。そのら。帰
 びせよ。と。照行大ぬ。ち。聽て。平馬が。書簡を
 請受室の津より。便船して。遠く。長州へ。ぞ。お。む。ける
 浩所。四月の上。浣卯原計を。為損。播州へ。逃

来りし平馬ハ伯母をも第宅の裡にふくみ
 おきて人ぬきまらるるなりしかどか富士太郎ハ回
 國の行者ハ打扮笠をふくくして播磨路を經歷し
 次の年の春の季までもひら國を索ねしを浅間ハ
 ささり母の卯原ガ往方まきささるるに今ハそめひ
 たえ遂に中國を経て四國にささりしを筑紫のむて
 まても普く索ね廻りぬる月日も路も遙るも然る
 程ハ照行ハ長門の西山中ハふくく匿きてありけり
 その年も暮て春も三月の下旬にありぬ粵ハ赤
 間下關ハ阿弥陀寺といふ蘭若ありけりこの寺ハ

安徳天皇の影像を安置し平家一族の遺物を
 藏ひしりて毎年の三月廿四日安徳天皇の祭祀ハ
 平氏の爲に法を修むるを終むるをまらるる文治元年
 三月廿四日天皇西海に沈没しぬ平家の諸將陣
 没せし日さるるありしりてこの日居多の鬼蟹おのづから
 赤間関のめぐりぬるをあるに彼関の遊行女ハ
 その鼻祖平家の残黨めて某の媛君何かの女房と
 呼ばるるやとさき御達の落魄て便るまらるる浮身の
 宿の憂めあらるる津の遊君とありしりそのかき
 今ハ絶せむとあらるる五重衣ハ緋袴を着て



浪路歌
詠下七
路小照行
誘ふ

客の上座に居るも壽永の餘波ありとや。さきば
 阿弥陀寺の法祀への遊行女ども一際花麗に
 装ひ飾りて彼寺に参詣せし年第一番の
 節間あり照行八里入の物がりみて豫てその
 聞つる久々山住居して為るもかく歌を防がの
 用心もやうやく解みけき赤間関に赴きてひそふ
 祭祀を見むと思ひ編笠ふろくうち戴りて阿
 弥陀寺に詣りて安ん違はむ彼此の老弱群集し
 いと艶る遊行女のゆくもあり歸るもわけて左布流が
 媚ハ萬葉集に遺り長柄が蛛ハ忠見の集に

見ると六暮ゆく春も栄わけてゆきさくらさくらなく照
 行忽地ぬらう蕩魂既ぬううきて見たりく歩む間小
 前面より来る遊君の袖の刀の鞘を引くければさ
 くと抜て落んとするせうち驚きまてりともわが慌しき
 その袖を楚と握りて引とむは番奇南の薫發とうひて
 庚嶺雪融梅吐香々とわくまる。されど女の騒ぐと氣さ
 かくて
 たるまの面影山の春霞ひくひわびてささる
 と听しつ。莞然と咲る風情ハ鳥も驚て松蘿み入り魚も畏て

三目巻之五

二四

荷か花はなの沈しづむはるるまはけの西せい施しはとまらうと鑑かんふ人ひとは魚いさなをたのむ
 従したがひ来きたる老お三板さんぱんの老らう三板さんぱんの老らう三板さんぱんの名なを問とはとまら赤あか間ま関かんの長ながの家いえ
 たる浪なみ路ぢの君きみをてけつと答こたへてりし久ひさ照あき行ゆきありしもの
 目め送おくりて行ゆきもやむむつるが彼かの女をんな子こ他人たにんの妻つまもくば意いとも途みち
 り難がたくらんこま色いろを街まち情なさけを賈あまふ遊あそ行ゆき女をんなもつを峯たかねのまら雲うみ
 花はなと見みるが手てを空ひらしく已やまんハ朽くちせしきん今いま宵よその長ながが
 家いえのいあきて彼かれと遊あそびあつさるとひとりごち俄いつ頃ころの衣え紋もんうい
 繕つくろひ湊みなとを望のぞみてのまぎしハ風かぜ流ながの涼すずみ係けるるべし

三さん國こく一いつ夜や物もの語ご卷まき之の五ご畢ひ 九くかか五ごよよ



